医療維新

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ »

眼科領域の“大谷”目指す、NY留学経て野心に火

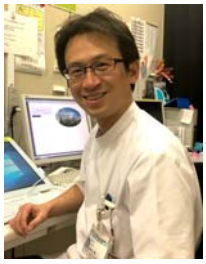
病院と眼科医グループ双方の人間関係が医師としての幅に-テーマ4「急性期」Vol.3-

オピニオン 2018年12月21日 (金)配信 JCHO中京病院 眼科 横山 翔

横山 翔 Sho Yokoyama
JCHO中京病院 眼科

【略歴】2005年浜松医科大学医学部卒業。社会保険中京病院（現JCHO中京病院）研修後、同病院眼科医員として勤務。2017年2月からJCHOグループの留学制度最初の対象者として渡米し、同2月からNew York University、同年9月からIcahn School of Medicine at Mount Sinaiでの研究生活を経て、2018年4月JCHO中京病院眼科に復帰し現在に至る。

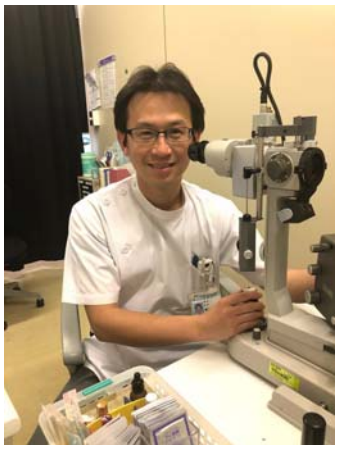
【所属学会・取得資格等】日本眼科学会 眼科専門医、日本網膜硝子体学会 PDT認定医。日本眼科手術学会、Association for Research in Visual Science and Ophthalmology、American Academy of Ophthalmologyなど。



現在私が勤務しているのは愛知県名古屋市にあるJCHO中京病院です。最寄りの駅がJRは熱田駅、名鉄は神宮前駅という名であり、織田信長との縁が伝えられている「熱田神宮」が地域に根付いた場所にあります。当院は病床数約660床の急性期総合病院で、眼科は自分を含め専門医8人と専攻医3人の計11人が所属しています。なかなか1つの病院でこれだけの眼科医が所属しているのは珍しいと思いますが、JCHO中京病院ではさらに約15人の眼科医が非常勤として専門外来や手術を行いに来る体制になっています。この体制については後述します。

当院の眼科はとにかく患者数が多く、4つの診察室が1日中フル稼働していますが既にパンク状態。最近やっと、5つ目の診察室が稼働し始めましたが焼け石に水であり、診療室をなんとかもう1部屋増やせないか密かに画策中です。手術も多く、2部屋をほぼ毎日フル稼働させています。また、救命救急センターが併設されており、一般的な眼科救急疾患である網膜剥離や緑内障発作の患者さん以外にも外傷による眼球破裂や角膜熱傷の患者さんも来られます。一般的な眼科疾患から重症患者までさまざまな患者さんが来られるので、いろいろな症例を経験することができます。

病院とは別の「中京グループ」にも所属



私はJCHO中京病院の一員として働いていますが、一方で「中京グループ」という、以前当院の眼科主任部長であった市川一夫先生が立ち上げた眼科グループの一員でもあります。中京グループには現在30人以上の眼科専門医が所属しており、眼科医以外にも看護師や視能訓練士といったコメディカルの方々、グループ運営をサポートして下さるパラメディカルの方々含め総勢60人くらいで構成されています。

よく「中京グループって何ですか？」という質問をいただくのですが、平たく言うと大学の医局や地域にとらわれず日本全国、ひいては海外の病院や開業医とも連携し、外来や手術といった臨床を中心に行っているグループ、といったところです。具体的にはJCHO中京病院を中心に、岐阜赤十字病院、長野飯田市立病院、一宮大雄会病院といった総合病院を含めた9病院と開業医23施設と連携。国内では北は仙台、南は鹿児島まで、国外では中国の大連やモンゴルのウランバートルと、さまざまな場所で手術を行っています。グループ関連病院や医院に所属している先生方は所属している場所のみならず、要請があればさまざまな場所で手術や外来を行います。私もJCHO中京病院で勤務しながら要請のあった病院や医院で手術や外来を行っております。

中京グループ全体で行っている白内障手術件数は年間約1万5000件と、全国の白内障手術件数の約1%に当たります。改めて考えると、一つの眼科グループだけでこれだけの手術件数を行っているというのはなかなかすごいことだと思います。また中京グループのもう一つの特徴として、さまざまな専門分野が揃っているという特徴があります。角膜、屈折矯正、白内障、緑内障、網膜硝子体、眼形成、斜視・弱視などの分野があり、一般的には1つの病院でこれら全ての分野を網羅することは難しいのですが、中京グループ内には前述した全ての分野の専門医が所属しているので、JCHO中京病院で全ての分野を網羅できるよう、常勤の医師で対応できない場合でも非常勤医の先生方に専門外来

や手術を行いに来ていただいています。非常勤の医師約15人が、日常的に手術や外来のために来てくれるのはこのためです。

病院とグループ双方に所属するメリット

中京グループのことを知ったのは浜松医科大学を卒業後、JCHO中京病院（当時は社会保険中京病院）で初期研修に臨んだ際です。当初の印象としては、皆とにかく手術をたくさんしており、とても自由に働いているイメージでした。自分に合っていそうなグループと感じ、研修修了後、そのまま中京病院に所属し、同時に中京グループに入りました。

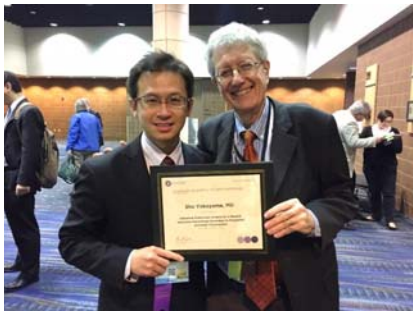
初期研修を修了後、眼科医になって初めの2年間はみっちり基礎を教えてもらいました。厳しくもユーモアのあるたくさんの先生方に指導してもらいながら、また同期の仲間とお酒を飲みながら日頃の仕事の愚痴や不満を言ったりもしつつ、たくさん勉強できた濃密な日々でした。その後、2年間かけてある程度1人で外来診療や基本的な手技や手術を行えるよう指導していただきました。新専門医制度への移行期間と重なったこともあり1年後ろ倒しの医師8年目で眼科専門医試験に合格。その後は、網膜硝子体分野の専門医としてmedicalとsurgicalの両方について勉強させていただきました。今ではたくさんの患者さんの診察や手術をさせてもらい、楽しく充実した毎日を送っています。

いつの間にか眼科10年目になっており、後輩もたくさん入ってきました。ただ、不思議なもので、中京病院にいると上から4番目の眼科経験年数となりましたが、中京グループでは特に定年もなくトップの市川先生をはじめ私よりはるかに年配の先生方が今でもたくさんばりばり手術しているので、いつまで経っても“下っ端気分”が抜けません。まだまだ諸先輩方から学ぶことも多く、これからも研鑽を続けなければならない、という新鮮な気持ちを持ち続けることができることも中京グループのいい所なのかもしれません。

NYでの海外留学

2017年2月から2018年3月まで米国NYへ留学させていただきました。JCHOグループの制度を使った初の留学ということで、当院の絹川常郎院長にはご尽力いただき大変感謝しております。留学中はJCHO中京病院眼科部長の加賀達志先生のご紹介で、加齢黄斑変性の研究を行っているNew York UniversityのR. Theodore Smith先生の下で勉強させていただきました。同年9月にはSmith先生がIcahn School of Medicine at Mount Sinaiへhead huntingされ所属を移られたため、私も一緒にそちらに移りました。留学中はSmith先生の研究分野の一つであるQuantitative Fundus Autofluorescence（眼底自発蛍光画像を数値的に評価する方法）についての研究のお手伝いをさせていただきました。留学中は、なにより英語が大変でしたが、Smith先生はじめラボの仲間たちは皆とてもフレンドリーで、特に一緒の時期にチリから留学に来たフェローにたくさん助けてもらいながら楽しく貴重な時間を過ごすことができました。

留学中は普段接することができない海外の著名な先生方や、同年代で活躍している先生、また留学に来ていた日本人の先生方とも知り合うことができ、自分にとって本当に素晴らしい時間でした。留学中には、私が日本で行っていた眼内視鏡を用いた網膜下手術に関する研究をSmith先生にも見ていただき、Smith先生監修のもと2018年の米国眼科学会のビデオセッションに応募したところ、最も優れた演題であるBest of showの一つに選ばれるという大変名誉な出来事もありました。同学会のアクセプト率が30%程度と聞いていたので、アクセプトされただけでも大変うれしかったのですが、さらに賞までいただき本当に良い経験になりました。同時に、日本の研究は海外でも通用すること、海外で認めてもらうにはアピール力も大事なことを実感しました。



Best of show受賞！！
米国眼科学会でBossのSmith先生と一緒に

さらに留学中には、日本では気付かなかった世界の眼科医療情勢を感じることもできました。新しい医薬品の治験や大規模スタディが米国主導で行われ、これらの分野で勝負するには大変なお金と労力がかかること、韓国や中国、台湾やシンガポールといった国々の勢いもすごく、一極集中型のビッグデータを用いた研究成果を次々に出しており、このままでは日本は他のアジアの国々にも負けてしまうこと、自分たちが世界で勝負するには得意分野である臨床や手術で勝負すべきで、これから日本は青色発光ダイオードの発明や大谷翔平の二刀流のように、日本発のオンリーワンのものを生み出す必要があることなどなど……が思い浮かびます。そしていつかは自分も世界で戦う日本のプロジェクトに携われたら……、今はそんなことを感じています。

約1年間の留学生活もあっという間で、2018年3月からはJCHO中京病院に復帰させていただき、今では留学生活を懐かしむ間もなく、留学前の日常であったいつもの多忙な日々を過ごしています。そんな中でも、留学した貴重な経験を普段の診療だけではなく今後の臨床研究に生かせないかと、現在さまざまに画策（or思案？）中です。

これから

眼科医になると決めるまでは他のいろいろな科と迷いましたが、眼科医になると決めてからは大学の医局に属さずJCHO中京病院に所属しながら中京グループの一員として働いてきて、後悔は全くしていません。大学の医局とは異なる部分もあり、中京グループのようなグループは全国で見てもあまり例がありません。そういった意味では、今後、

自分とこのグループがどうなっていくのか、一抹の不安もなくはないですが、それよりも今は期待に胸を膨らませています。これからはこれまでの経験、そして留学中に感じ取った海外と日本とのいろいろな違いを感じながら、次の10年をどう過ごしていくかが大事だと思っています。今後の自分に期待しながら、またこれからの10年間を駆け抜けていこうと思います。また10年後に「医学部卒後20～25年目の医師たち」～JCHO編～みたいなコーナーがあれば寄稿させていただこうかな……。またその際にはよろしくお願いいたします。

JCHO中京病院の職場の皆さんと。これからも頑張ります！！！（手前右から2番目が筆者）

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ »